



日本大学医学部創設100周年記念式典・記念祝賀会

日本大学創設100周年記念誌編纂委員長 西成田進（医学部同窓会監事）

日本大学専門部医学科の設立は大正14年（1925）3月31日付で認可され、第1回の入学試験が同年4月19日に施行された。令和7年（2025）はそれからちょうど100年にあたる。

本年10月26日午前11時、「日本大学医学部創設100周年記念式典・記念祝賀会」がホテルオークラ東京“平安の間”で盛大に開催された。式典は日本大学理事長林真理子氏、学長大貫進一郎氏のご臨席を仰ぎ、木下浩作医学部長の挨拶で開始された。式典ではまずご来賓の相良博典氏（一般社団法人全国医学部長病院長会議会長）、炭山嘉伸氏（一般社団法人日本私立医科大学協会会長）からのお祝辞を賜った。両先生のお祝辞は、日本大学医学部の歴史を詳細に振り返り、我が医学部が今日の医学界に大きな足跡を残してきたことを実に丹念に総括され、集まった式典参加者に大きな感動を与えた。また炭山先生は現在東邦大学医学部長の要職にあり、東邦大学医学部は日本大学医学科設立の功労者で初代医学科長額田豊先生と創設者を同じくする。100年の歴史を同時に歩んできた姉妹校とでもいうお立場の先生からのお祝辞は参加者に特別な感銘を与えた。次いで海外で活躍する同窓生・ハーバード大学外科学教授河合達郎氏（第54回生）と木下医学部長による“医学部の将来”に向けた対論（ビデオ）が紹介され、式典は日本大学医学部事務局長吉村利明氏の閉会の辞でその幕を閉じた。

その後会場を移し、午後0時30分から記念祝賀会が開催された。祝賀会では400余名の参加者の下、日本大学医学科・医学部が100年を歩んできた地“板橋区長”坂本健氏の祝辞に始まり、日本大学業務執行理事浅井万富氏、日本大学医学部同窓会長吉澤明孝氏からお祝辞をいただいた。

続いて「鏡開き」では岐阜の銘酒“百春”の樽酒が提供された。この酒は医学部同窓会理事伊藤大介氏（61回生）が岐阜県同窓会へ参加した折、偶然立ち寄った地元小坂酒造の醸造によるもので、同酒造縁故者に日本大学出身者が多く、さらに酒名“百春”が今回の祝賀会にふさわしいものであることから急遽準備されたものであった。会は日本大学副学長兼板佳孝氏（医学部教授）による乾杯の音頭で

開始された。会は正面の大きなスクリーンに映された医学部・医学科の歴史を振り返るスライドが流される中、和やかに進行した。会半ば、中里龍生氏（医学部61回生）によるサキソフォン演奏が加わった。その演奏は見事で臨席の参加者は“あの方はお医者さんやっているのかしら？”の声が上がるほどであった。その後、衆議院議員安藤高夫氏（第57回生）の祝辞があり、会は盛会のうちに日本大学附属板橋病院長吉野篤緒氏の閉会の辞で幕を閉じた。

あちこちのテーブル、フロアでの会話は終始熱気にあふれ、記念祝賀会は「100周年」をきっかけに普段顔を合わせることとも少なくなった同窓の輪で大いに盛り上がった。

今日の「記念式典・祝賀会」に向けて準備されてきた「日本大学医学部創設100周年記念史」は約400ページからなる書物である。大きく「医学科・医学部の歴史」と「現医学部各教室の歴史と現況」の二つからなる。「歴史」はさらに大きく「医学科時代」と「医学部時代」に区分されている。「医学科時代」の大半は日本社会の激動期、関東大震災に始まり太平洋戦争とその後遺症に終わる時代と重複する。しかし、この社会の激動と医学科・医学部との歴史の間に何幾つかの切れがあり、戦前医学科時代の制度が無くなる真の医学科の終焉は昭和30年代半ばとなる。後半、ほぼ50年の歴史は日本社会の経済的発展と医療制度の充実、医学自体の進歩に連動して、医学部は病院、教育・研究施設の建設ラッシュの時代に突入していく。この時代は昭和46年、東洋一と評された附属板橋病院の完成で一つの区切りを迎える。そしてさらにそれからの50余年、戦後復興から再興した医学部とそれを取り巻く一群の臨床・研究施設はさすがに時代の要請に耐えがたく、続く時代も建設ラッシュは継続されることになる。狭小なキャンパスの中で医学専門学校から大学への昇格を目指し、臨床医学と人格の涵養を同時に目指した医学科創設時の学生・教職員の情熱（額田イズム）、戦後復興を乗り越えて現在に至る医学部キャンパスの完成を目指した先人たちの思いが今後も受け継がれていくことを確認する立派な祝賀会であった。